ところが、今日の霞ケ浦をとりまく有機汚染に対する対応策の否定的な状況は、現在も刻々と大量の栄養源が放出され流入しつづけているという事に象徴されています。事さらに、水に関した意識の問題においては、周辺生活者の中で自己消化され空転しているのです。「湖は河は汚れている」それを四苦八苦し、用水に耐えうるものとして使う。……そういった状況を知りつつ、許す人間の、水に対する理性の鈍さが回っているのです。我我は汚染の結果が生む最悪の事態を直前にするまで、増増悪化する生活環境の中で、悶え苦しみ、湖とともに絶えてゆくでしょう。霞ケ浦に依存する住人が、今日の社会構造にそのまま甘んじる体制をつづけ、いままでの行政を許してゆくなら、湖はおろか、地域住民も霞ケ浦のヘドロの中に埋れてゆくのでしょう。

自然と対面した時、自然そのものから受ける
迫力や大きさや崇高さを……私はよく覚えて
いますよ。しかし、それにしても、
人間は、自然を汚ごす事にかけては、いかに
巧みで強力であったのでしょう。
それにひきかえ、自然はその事に、
いかに従順であったでしょうか。

（学　生）

短　歌

飛鳥より紫山といはれしつくば嶺を
　死山とするか心なき者よ
千五百馬力の浚渫船の影おとす
　霞ケ浦は巨大な水がめ
あゝあはれ汝が故郷の霞ケ浦は
　こんなに汚れてしまふた
破壊され自然のすべて破壊され
　いにしえより今も破壊され
つくば嶺よ霞ケ浦よ桜川よ
　赦して給ふ赦して給ふ

（都和町　設楽　誠）

「鳥たちが死滅していく姿は、ごく近い将来の人間の姿でもあるんです。その意味からもこれ以上の乱開発をやめると共に、ムード的な保護論でなく、県内全体を禁猟区にするなど実効を伴った対策を望みます。」
県野鳥の会々員　望月和夫氏談
（朝日新聞　この人より）